



「見たり、聞いたり、探ったり」No.210

通算 No.362

青 木 行 雄

沖縄県石垣島・八重山諸島  
「竹富島」(タキドゥン)

沖縄県石垣島は日本の最南端。日本本土は四季があるが、この最南端の島は紅葉はなく3毛作と言い、3月18日が海開きであった。外国風な日本と言える。石垣島の周辺の島々を八重山諸島という。石垣島の本島から、近隣の島々に行くには石垣港から船が頻繁に出ており、非常に便利である。

今回主題の「竹富島」に行くには、石垣港から30分おきで船が出ており、高速船で約10分の近さであった。

この竹富島は、人口は(2016年7月末の調査)365人。時期により、観光客の方がはるかに多いと思う。面積5.42km<sup>2</sup>で外周が9.12km、島内は平坦な島で山はない。島内を歩くにはちょっと時間がかかるので、レンタサイクルで島内を散策した。小型観光バスや水牛車もあるが制限があるようだ。

この島は隆起サンゴ礁の島といわれ、島の石垣は殆ど、サンゴの石垣で作られている。家の柱の土台もつみ石もみなサンゴ石であった。よく見る沖縄の原風景。赤瓦造りの1階建てで、屋根にシーサーが乗っている風景を写真などで見たことがあると思うが、まさしくこの八重山の島々がその原風景ではなからうか。

「竹富島」に着いたら、港に送迎のバスが何台かいて、その内の「新田観光」の送迎バスに乗った。

もう少々竹富島の自然について説明すると、

「自然環境が育んだ文化景観の島」として全体がいりおもて西表石垣国立公園に指定されている。サンゴ礁に囲まれており、西部には日本最大のサンゴ礁である石西礁湖が広がり、島北西部のタキドゥングチ、島南西部のシモビシ、南部の竹富南は西表石垣国立公園



※八重山諸島内の石垣島から、30分おきに竹富島行きの船が出ています。島内の海岸線の長さ、9.12km。太平洋・東シナ海にある島々。



※竹富島の港、私の乗った船である。すぐに迎えのバスに乗り、島内観光へ。

海中公園区域に指定されている。島の西側にはコンドイ浜(海水浴場)や星砂(太陽の砂)で有名な皆治(カイジ)浜などもある。行かないとわからない。

最近は様々な蝶が飛び交うことから、「蝶の舞う島」とも言われているらしい。(ただし、「竹富島憲章」では昆虫採取は禁止されている。)

島の北東部約1km・約水深20mには海底温泉が確認されており、観光資源として活用することが検討されているという。

尚、1945年(昭和20年)の終戦後に島全体が畑と化したため、古来から保たれている森林は殆ど見られないようだ。(見てはいないがほんの一部にあるらしい。)

サイクリング中に2~3の集落に出会ったので調べて見ると、3つの集落が島の中央部から北西部にかけて位置しているという。東集落は「あいのた」、西集落は「いんのた」、南集落は「仲筋(な一じ)」という。集落景観は、木造赤瓦の民家と白砂が撒かれた道を基調としている。なんとも南国らしく、毎朝観光客の為に島民が道路全部の清掃をしているという。

町並みは、重要伝統的建造物群保存地区に選定されており、「なごみの塔」「西栈橋」「小城盛」などの歴史的建造物が数多くみられる。その他、「カイダー字」「藁算」「パナリ焼」(喜宝院蒐集館の収集物)など数多くの貴重な生活記録が保存されている、温暖な気候、濃密な地域コミュニティ、年長者を敬う島民性、薬草が豊富に自生しており食べ方を熟知している、粗食や勤勉を貴ぶ習慣があるといった特色などから「長寿の島」と言われているらしい。

サイクリングで散策中に小さな店へ水分補給のために立ち寄る。大変親切で、島民の人柄が良くわかった。

1986年(昭和61年)に「妻籠宿を守る住民憲章」などを参考とした「竹富島憲章」が制定された。同憲章には「売らない」、「汚さない」、「乱さない」、「壊さない」の島を守るための4原則に、伝統文化と自然・文化



※ここが私の乗った水牛の駅「新田観光」の駅舎。



※発着の駅、この水牛の名前は「サブちゃん」。なかなかの人気水牛らしい。



※見てもわかるように真白の道でサンゴの砂である。石垣は「サンゴ石」で出来ている。

的景観を観光資源として「生かす」を加えた基本5原則をはじめ、島の伝統文化を大切にする精神や来島者を接遇する際の心構えなどが謳われている。また、同憲章の主旨にもとづいて、竹富島民の自治組織である地縁団体法人竹富公民館内に竹富島集落景観保存調査委員会(まちなみ調査委員会)を設置し、景観を保全する上で島民が直接参画できる制度を確立しているという。1994年(平成6年)には多くの外部者が関わる形で「竹富島景観形成マニュアル」も発行された。

この細則を記して見る。

- 一. 新しく家を建てる場合は必ず許可を得た上で、平屋の赤瓦の家(カーラヤー)を建てなければならない。ただし、赤瓦を葺く場合は補助金が支給される。
  - 一. 窓ガラス等は見えにくいようにすだれなどで隠す。
  - 一. 建物の外に看板などを露出させることは原則禁止。
  - 一. 大規模リゾート開発を目的とした土地買収には応じない。
  - 一. 珊瑚を砕いた白砂の道は、住民の毎朝の掃除によって美しい状態に維持されている。(この細則の中にあっただ)
- また白砂はアスファルトと違い、雨や台風が来るたびに、少しずつ海に流れていってしまう。そのため、住民は砂浜の白砂を集めてきて、定期的に道を補修している。
- などがこの細則の例である。

赤瓦屋根については、大昔からではなく、最初に建てられたのが1905年(明治38年)で、普及したのは大正に入ってからであり、古くからの竹富島の「伝統」とは言えないが、観光資源として生かされている。また、島のほぼ中心部にある赤山公園内のなごみの塔からは、赤瓦屋根の集落が見渡せる。この風景はさすがに最南端の島に来たんだという実感がわいて、今でも脳裏に焼き付いている。

ちょっと竹富島の歴史にふれてみると、

竹富島の出土品でもっとも古いものはカイジ浜遺跡の貝塚で紀元1000年頃と推定される。竹富町の史跡に指定されている島東北部の新里村遺跡からは陶



※この四角で「サブちゃん」は考える。全長7mある牛車をうまく右に切るにはどんな角度で廻るかを。



※島内で一番高い所、「なごみの塔」。ここから見る赤瓦屋根集落は南国ならではの風景である。



※なごみの塔から見た赤瓦屋根。こんな集落が竹富島には3カ所程あるらしい。

磁器の破片や穀物の種子、石積みの跡が出土したという。年代は竹富島最古の井戸といわれる花城井戸(ハナツクンガー)を境に東側が12世紀頃、西側が14世紀から15世紀頃と推定される。

いろんな歴史を経て、一時、竹富島のカイジ浜に蔵元(行政府)を置き、八重山を統治すると伝えられていた。

旧八重山村が分村し、竹富村が発足した当初も竹富島に村役場が置かれていたが、1938年(昭和13年)に村外の石垣島へ移転して以来、町役場は石垣市に置かれ、島内には役所もおまわりさんも居ないらしい。

島は隆起サンゴ礁でできているため稲作に適していない。しかし琉球王府時代の貢納対象は米であったため、島民は税を納めるために、船で西表島に渡って耕作し、出作を行っていた。米作りは1879年の琉球処分後も続けられていたが、1945年(昭和20年)の太平洋戦争終結後、台湾や本土へ出稼ぎに出ていた出身者が大挙島に戻り島内の食糧事情は悪化した。そこで、島民の食糧確保のために1950年(昭和25年)、西棧橋が現在の姿に整備された。西表島への通耕は本土復帰前後まで行われていたという。2005年(平成17年)には、隣の島である黒島の伊古棧橋と共に、登録有形文化財に登録された。この黒島の伊古棧橋はまだ見えない。

産業としては、もちろん観光が主要産業である。島内には十数か所の民宿がある。また旅館1軒、ゲストハウス1軒、ホテル2軒。でも殆どが10分で来れる石垣島の宿泊施設から日帰りである。私も石垣島から日帰りであった。

まず「竹富島」に着いて一番先に乗ったのが、水牛の「観光バス」(牛車)であった。そして私の乗った水牛の名前が「サブちゃん」と言った。車体の長さが中型のバスの長さ6~7mぐらいあり、角々をまがる時、至難の業がいる。「サブちゃん」は四角にあたると石垣を壊すことなくうまく通ったが、なかなか難しいらしい。私の乗った「新田観光」では水牛が20頭ぐらいいて、全部名前が付いており、なんと有名人ばかりの名前が付いていた。行って乗ってみなければわからない、楽しさがたくさんあり、車頭の話や語らいがおもしろく、地元の歌まで三味線で披露して南国の興味が一段と盛り上がりムード満点であった。

地元の人に聞くと、一番のベストシーズンはやっぱり台風のない3~4月頃と言うが、八重山地方の台



※南国独特の木があって、「水道記念碑」があった。木の花が落ちていて、南国のムードをそえる。



※南国の海岸らしく、サンゴの砂浜が続く。星砂の浜もあって、見事と言う他はない。表現の言葉が見あたらない。

風の強さも味わって見るのも良い経験でしょうという人もいた。

あなたはどちらにしますか。一度行ってみましょう。

#### 参考資料

地元の観光パンフレット

ウィキペディア

『日本史年表』 岩波書店

平成29年8月6日記



西棧橋